

ストラがなべてそうであるように、コンサート活動をも行ってきた。ヴァイグレも旧東ドイツ時代から、ベートーヴェンの交響曲などを盛んに——日本にも来て！——演奏していたのである。

さらにヴァイグレの個人史をさかのぼるなら、彼は東ベルリン郊外のブーフという所に生まれ、当地の教会のカントールを務める父、ゴットフリート・ヴァイグレのもとで育った。ハイドンのオラトリオやバッハのカンタータが身近にあったのであり、父ヴァイグレは、息子に指揮の代行を託すこともあったという。ちなみに、伯父で、やはり指揮者のイェルク＝ペーター・ヴァイグレも、甥に指揮者の道を奨めていた。

セバスティアン・ヴァイグレはだから、オペラ以外の音楽をとうの昔から知っている、ということになる。いや、そもそもが、オペラハウス、コンサートホール、教会といった場の違いを超えた、より包括的な「音楽」のドイツの伝統を生きてきたのである。分業化が進み、コンサート指揮者なる新種がむしろ主流になった現代において、逆に珍しい人のようにみえるだけなのだ。

さて、ここで筆者は思うのだが、こうした包括的な音楽のあり方こそ、音楽の「ドイツ的」ありようではなからうか？ オペラも、シンフォニーも、オラトリオも、いわば通分するような共通分母が、そこで育まれる。それを、音楽の「叙事性」と呼んでみたい。つまりは、ハーモニーのエモーショナルな展開（和声法）と、それに条件づけられた旋律の綾（対位法）を通じて、私たちの感情に物語のように切々と語りかけてくる、そのような性質。ヴァイグレが今シーズン読響で指揮する作品をみてみよう。ベートーヴェン、メンデルスゾーン、シューマン、ブルックナー、ブラームス、ロット、マーラー、プフィッツナー、R. シュトラウス、ヒンデミット。これらどの音楽も、そんな叙事性に貫かれていないだろうか。

なればこそ、それを生んだのと同じ土壌からやってきたヴァイグレに期待できるのだ。筆者はたとえば、あの不思議なくらいケレン味を排した、囁んで含めるような彼のR. シュトラウスを聴くとき、そうした期待を抱く。もちろん、ここでいう叙事性とは違うところに賭けた、いわば並列的な音楽というものもあるのであって、前任者シルヴァン・カンブルランが得意とした現代フランスのメシアンなどは、まさにそうだろう。その意味でも、今シーズンからまた別種の楽しみが私たちに待っているとさえそうだ。

〈ふなきあつや・音楽評論〉



セバスティアン・ヴァイグレ ©読響

「コンサートオーケストラの監督業を引き受けることは、今この時点の私にとって、よい一歩だと考えています。シンフォニック・レパートリーに、さらに力を入れて従事することができるのですから」

2018年5月。セバスティアン・ヴァイグレが読響日本交響楽団の新しい常任指揮者になることが発表されると、彼の故国、ドイツのメディアも、早速これを報じた。上の発言は、その際に伝えられたヴァイグレの発言である。

バルセロナ・リセウ歌劇場、パイロイト音楽祭、フランクフルト歌劇場——ヴァイグレの活動のこれまでの中心地は、たしかにオペラ劇場ばかり。読響のようなコンサート専門のオーケストラが、彼自身にとって次なるステップになるというのは、その通りなのだろう。いかにも、昔ながらのドイツ風「歌劇場たたき上げ」指揮者？ ただし、ヴァイグレをコンサート・レパートリーに「疎い」人とみれば、事態を見誤ることになる。

ヴァイグレは、ダニエル・バレンボイムの後押しを得て指揮者となる以前は、著名なホルン奏者であった。1982年、21歳のときに入団したのは、ベルリン国立歌劇場座付きのオーケストラ、シュターツカペレ・ベルリン。しかし同団は、ドイツ——そこにはフランスにおけるパリのような中心都市がない——の歌劇場のオーケ

「ドイツ本格派」がやってくる

——ヴァイグレ就任の意味とは——

船木篤也

読響のドイツ人指揮者の系譜

佐々木喜久

当団の歴史をたどると、数多くのドイツ人指揮者をポストに迎え、巨匠との共演も多い。今回のヴァイグレ就任を機に、読響を率いたドイツ人指揮者たちを振り返ってみよう。(編集部)

60年代、創成期を築いた巨匠たち



オットー・マツェラート
©読響

読響が初めてドイツ人指揮者をポストに迎えたのは、創設の翌年(1963年)、第2代常任指揮者のオットー・マツェラート(1914~63)だ。25歳でバーデン州立劇場の音楽監督に就き、フランクフルト放送響の首席指揮者を務めた。巨匠フルトヴェングラーにも認められ、ベルリン・フィルにも客演した期待の中堅であった。当時、読響のコンサートマスターだったドイツ人のシュタフォンハーゲンから「売り出し中の優れた指揮者がいる」という助言を得て、思いもかけず早々に獲得できたのだ。63年9月の第1回定期演奏会の曲目は、ベートーヴェン〈英雄〉に始まり、ブラームスのピアノ協奏曲第1番(ピアノ:園田高弘)、R.シュトラウス〈ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら〉。これぞドイツ音楽という曲を並べ、自信に満ちた堂々たる演奏で、満員の聴衆を魅了した。

10月の第2回定期は、モーツァルト、シェーンベルク、シベリウスを取り上げて一味違う曲目で魅力をさらに広げ、誰もが読響の輝く未来を確信した。しかし、同月末の特別演奏会がまさか最後になるとは、誰が予想できただろうか。ベートーヴェンの交響曲第8番を指揮し終えたところで、マツェラートは倒れ、3週間後に49歳という働き盛りで昇天してしまった。チェロ奏者の吉田貴寿は、そのわずか3か月の間を回顧して、「練習態度は厳しかったが、楽員は彼のテクニックと音楽性に尊敬と信頼の念を抱き、よい指揮者を得て安心と希望に胸を膨らませていた」と追悼の辞を記している。

この時読響は、客演指揮者としてウィリー・シュタイナー(1910~75)と契約していたことで、その後の定期公演に穴を開けずに済んだ。シュタイナーはベルリンの音楽一家に生まれ、47年にハノーファー放

送響の常任指揮者となった。シュタイナーが第4回定期で振ったのは、マツェラートが予定していた、ブラームスの交響曲第3番などである。シュタイナーによれば、「彼が生きていたらどう振るかその意図を再現したいと思った。それが故人に対する弔意だと考えた」のだ。その後、彼は64年5月まで客演した。

読売新聞社は70年に、「ベートーヴェン生誕200年記念連続演奏会」を開催した。その締めくくりに、読響は東京厚生年金会館で〈ミサ・ソレムニス〉、日本武道館で〈第九〉という、晩年の大作を演奏する栄を担い、指揮者として招かれたのがベルリン生まれの名匠ハンス・シュミット=イッセルシュテット(1900~73)であった。ベルリン・ドイツ・オペラの音楽監督を務め、戦後45年には北ドイツ放送響を結成し、首席指揮者として名門に育て上げた。読響には64年に初登場し、2度目の客演だった。どちらも見事な演奏だったが、演奏後の談話で、「本当はベートーヴェンの交響曲の中で、第4番が最も好き」と語っていたことが印象深い。

ギュンター・ヴァント(1912~2002)が、今から半世紀も前の68年に読響に客演していたことはあまり知られていない。ケルン市の音楽総監督を務め「ケルンのカラヤン」と言われていたが、世界的にはまだローカルな存在だった。ほぼひと月滞在し、計4回の公演を指揮、ブルックナー、ベートーヴェン、チャイコフスキー、モーツァルトという、ヴァントの真骨頂を聴かせる正攻法の堂々たる選曲によって、読響から西洋音楽の神髄に迫る響きを引き出して感動を呼び起こした。

70年代後半に初登場した東独の3人

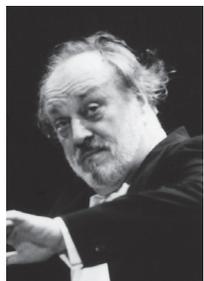
79年に読響は、旧東ドイツの偉大な指揮者、二人のクルトに名誉指揮者の称号を授与した。それまでの真摯な指導、深い伝統に培われたドイツ音楽の神髄への解釈を強化した功績に対してである。

クルト・ザンデルリンク(1912~2011)は、ベルリンで指揮の道に足を踏み出したが、ユダヤ人ゆえに、台頭するナチスの支配を避けるため、36年に旧ソ連に移る。41年から60年まで巨匠ムラヴィンスキーの副指揮者を経て、旧レニングラード・フィルの指揮者としてキャリアを積んだ。その後、母国に戻りベルリン響の芸術監督、ドレスデン国立歌劇場管首席指揮者を務めた旧東独を代表する巨匠だっ



クルト・ザンデルリンク
©読響

た。読響への初登場は76年12月で、以降客演を重ねた。最後の共演となった90年は、ベートーヴェンとブラームスの交響曲第1番、ハイドン〈熊〉など、いかにもドイツの長老らしい西洋音楽の本筋を見通した底光りする選曲だった。個人的には、78年秋に京都の寺社や庭園をめぐる旅に同行したときのことを思い出す。苔むした岩を軽やかな足取りで伝い歩きしていた老大家在、木立の間にひっそりと立つ拝殿に参拝した後、そっとつぶやいた。「今、すっかり心が洗われ、浄められました。ヨーロッパの寺院は、どこも血なまぐさくて、心の底から休まることがないのです」と。ソ連時代の活動については多くを語らなかった心情と思い合わせ、ドイツの音楽的伝統や内実を見つめ直してきたザンデルリンクならではの自然観がどう関わっているのか、とても興味深く感じたものだ。



クルト・マズア
©読響

骨太で長身のクルト・マズア(1927~2015)が、指揮台に立って鋭い眼光で眺め回すと、楽団員によれば、それだけでマエストロの威光がオーケストラを支配し、緊張感が高まったという。しかし彼は、教養のある温厚な紳士だ。76年9月の定期演奏会を皮切りに、最後の公演となった00年12月までに、ベートーヴェン、メンデルスゾーン、ブラームスなどの作品を多く取り上げた。88年にはブラームスの全4曲の交響曲を指揮し、「内容の濃い演奏を展開」「すべてマズアの期待通り、うまくはまったと言えるだろう」(読売新聞)と評されるなど、マズアは楽団員からドイツ音楽の巨匠として受け入れられ畏敬されていたが、共演の最初と最後がショスタコーヴィチの交響曲第1番というのもおもしろい。

78年の〈第九〉で初登場し、84年から89年まで6年にわたり第5代常任指揮者を務めたのは、二人のクルトと同じ冷戦時代の東独の名指揮者ハインツ・レークナー(1929~2001)だ。ライプツィヒ生まれで、ベルリン国立歌劇場の音楽監督、ベルリン交響楽団首席指揮者などを歴任。奥の深い味わいを持った演奏は、強固なファンを獲得した。特にブルックナーに力を入れ、第4番から第9番までの交響曲を取り上げた。任期中に話を聞くと、「楽団員は、音楽的情感を深くとらえ、それを演奏の中に表現しようという姿勢が出てきた。私の表現意図がたちまち後ろの奏者まで伝わるし、弦が色彩的になってきた」と満足そ



ハインツ・レークナー
©読響

うで、「日本は色彩豊かな国だから好きなのです。黒と白の墨絵でも、筆使いの強弱などで色々ニュアンスの違いがある、あの色彩でブルックナーやマーラーにはそうした色彩が豊かにあるのです」と語っていた。レークナーは、読響とベートーヴェンの交響曲全集を録音したが、外国人指揮者と日本の楽団による初の全集であった。

アルブレヒトの新たな挑戦

97年12月、ゲルト・アルブレヒト(1935~2014)はマーラーとベートーヴェンの二つの「第9番」を指揮して読響にデビューし、翌年4月に第7代常任指揮者に就任した。35年生まれの前派だが、音楽家としては戦争で荒廃した状況で育ち、57年にブザンソン国際コンクールに優勝した戦後派の先陣。同じドイツ人でも、東独の中核だった二人のクルトやレークナーに対し、アルブレヒトは西ドイツで生まれ育った逸材だった。ベルリン・ドイツ・オペラの前首席指揮者などを歴任し、97年までハンブルク歌劇場の音楽総監督を務めた。ドイツ音楽となると、とかく重厚というイメージがまとい付くが、彼のベートーヴェンはすっきりして端正といえるほどで、このスタイルは日本の音楽ファンに好意的に受け止められたようだ。また、知的刺激を高めるような複層的なプログラムを展開したことは画期的だった。テレージエンシュタットの強制収容所に入れられたユダヤ人作曲家を紹介したり、グルリットの歌劇〈ヴォツェック〉を掘り起こし、ヘンツェの歌劇〈午後の^{えいごう}曳航〉を日本初演するなど、未知の傑作の紹介に意欲を燃やした。さらにワーグナー〈神々の黄昏〉第3幕、〈パルジファル〉などオペラへの意欲も大きかった。一方、若手日本人作曲家委嘱シリーズを開始して注目を浴びた。また、二度の欧州遠征も成功させた。9年間の貢献度は極めて高く、退任後、読響が初めて桂冠指揮者の称号を与えたのが何よりの証しだろう。



ゲルト・アルブレヒト
©読響

2010年から9年間、フランス人の常任指揮者カンプルランとともに新たな境地を拓き、意志の強い輝かしい響きと豊饒な色彩感を獲得し得た読響は、東独生まれのヴァイグレを新たな常任指揮者に迎えて、音楽の本流に乗ることで、目指す高みに一挙に達するのも夢ではないだろう。ヴァイグレ×読響の活躍に期待したい。

〈ささきよしひさ・元読売新聞編集委員/ジャーナリスト〉

6月の公演

山田和樹が『ゴジラ』のテーマやロシアの隠れた名曲を指揮



6/13 木 第589回 定期演奏会
サントリーホール 19:00

指揮＝**山田和樹** (首席客演指揮者)
ソプラノ＝**アルбина・シャギムラトヴァ**
伊福部 昭：**SF 交響ファンタジー 第1番**
グリエール：**コロラトゥーラ・ソプラノのための協奏曲**
カリニコフ：**交響曲 第1番**

もっと知られるべき傑作！小林が熱望したフランクの交響曲



6/18 火 第623回 名曲シリーズ
サントリーホール 19:00

指揮＝**小林研一郎** (特別客演指揮者)
ヴァイオリン＝**キム・ボムソリ**
ビゼー：**歌劇〈カルメン〉 第1組曲**
ブルッフ：**ヴァイオリン協奏曲 第1番**
フランク：**交響曲**

“カリスマ”大植が16年半ぶりに登場し、〈シェエラザード〉を披露



6/23 日 第112回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール 14:00

指揮＝**大植英次**
ホルン＝**日橋辰朗** (読響首席ホルン奏者)
バーンスタイン：**ディヴェルティメント**
パウエル：**ホルン協奏曲**
リムスキー＝コルサコフ：**交響組曲〈シェエラザード〉**

6月公演の聴きどころ

6/13《定期》 読響・首席客演指揮者の山田和樹が登場する。山田はバーミンガム市響の首席客演指揮者、モンテカルロ・フィルの芸術監督兼音楽監督を務めるなど、世界で活躍する次代の旗手。今回は、メインにロシアの作曲家カリニコフの交響曲第1番を取り上げる。ロシア民謡や叙情性にあふれる雄大な曲を、山田が表情豊かに聴かせる。また、ウィーン国立歌劇場で〈魔笛〉の「夜の女王」役を歌う世界の歌姫シャギムラトヴァが、グリエールの協奏曲でコロラトゥーラを駆使した超絶技巧の歌声を響かせる。有名な『ゴジラ』のテーマ曲が含まれる伊福部昭の〈SF 交響ファンタジー〉も、映画の名シーンが思い浮かぶような迫力あふれる演奏が楽しみだ。

6/18《名曲》 読響・特別客演指揮者の小林研一郎が、「読響とぜひ演奏したいと思っていた曲」と語るフランクの交響曲に熱い思いを込める。チェコ・フィルとの2008年の録音以来久々に振る傑作で、重厚なサウンドを響かせるだろう。数あるヴァイオリン協奏曲の中でも広く愛されているブルッフのヴァイオリン協奏曲第1番では、ミュンヘン国際コンクールで最高位を獲得し注目を浴びているキム・ボムソリがソロを務める。読響とは2017年8月の《三大協奏曲》公演以来、約2年ぶりの共演。ほとぼしる才能と若さあふれる演奏に期待が高まる。

6/23《みなとみらいホリデー名曲》 ドイツを拠点に活躍する大植英次が、16年半ぶりに読響の指揮台に上がる。エネルギッシュなタクトで、リムスキー＝コルサコフの〈シェエラザード〉を^{けんらん}絢爛豪華に描く。また、大植がタングルウッド音楽祭で出会い恩師と慕ったバーンスタインの〈ディヴェルティメント〉も取り上げる。20世紀チェコで活躍した作曲家パウエルのホルン協奏曲では、読響首席ホルン奏者の日橋辰朗がソリストとして初登場。躍動感にあふれるドラマティックな曲で、抜群のテクニックと多彩な音色を披露する。

(文責：事務局)

お申し込み・お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390 (10時～18時・年中無休) <https://yomikyo.or.jp/>

小林が振る《情熱のドヴォルザーク》&クラリネットの名手が共演



7/6 土 第218回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

7/7 日 第218回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

指揮=小林研一郎(特別客演指揮者)
クラリネット=アンドレアス・オッテンザマー
ウェーバー:歌劇《魔弾の射手》序曲、クラリネット協奏曲 第1番
ドヴォルザーク:交響曲 第8番

ハンガリーの俊英ナナシと鬼才ピアニストのドゥバルグが初登場!



7/11 木 第590回 定期演奏会
サントリーホール 19:00

指揮=ヘンリック・ナナシ
ピアノ=リュカ・ドゥバルグ
コダーイ:ガランタ舞曲
サン=サーンス:ピアノ協奏曲 第5番《エジプト風》
バルトーク:管弦楽のための協奏曲

ソロ・ヴィオラの“ヤス”が読響メンバーと繰り広げる充実の室内楽



7/12 金 第22回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール 19:30(プレ・トークあり)

《鈴木康浩プロデュースの室内楽》
ヴィオラ=鈴木康浩(読響ソロ・ヴィオラ)
ルクレール:2つのヴィオラのためのソナタ 第4番
ヒンデミット:弦楽三重奏曲 第2番
ブラームス:弦楽五重奏曲 第2番

巨匠トーヴェイが《惑星》を振り、ドゥバルグがラフマニノフを弾く!



7/15 月・祝 第113回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール 14:00

7/16 火 第624回 名曲シリーズ
サントリーホール 19:00

7/17 水 第23回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール 19:00

指揮=ブラムウェル・トーヴェイ ピアノ=リュカ・ドゥバルグ
女声合唱=昭和音楽大学
ラフマニノフ:ピアノ協奏曲 第2番 ホルスト:組曲《惑星》

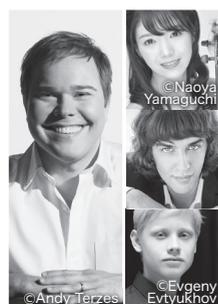
シカゴ響、ボストン響などを振る新鋭レーニンガーが初登場!



8/18 日 読響サマーフェスティバル2019《三大交響曲》
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

指揮=マルチェロ・レーニンガー
シューベルト:交響曲 第7番《未完成》
ベートーヴェン:交響曲 第5番《運命》
ドヴォルザーク:交響曲 第9番《新世界から》

世界へ羽ばたく3人の若手ソリストが、傑作協奏曲を次々と披露



8/21 水 読響サマーフェスティバル2019《三大協奏曲》
東京芸術劇場コンサートホール 18:30

指揮=マルチェロ・レーニンガー
ヴァイオリン=高木凜々子
チェロ=アレクサンドル・ラム
ピアノ=アレクサンダー・マロフェーエフ
メンデルスゾーン:ヴァイオリン協奏曲
ドヴォルザーク:チェロ協奏曲
チャイコフスキー:ピアノ協奏曲 第1番

哀愁の旋律と胸に迫る熱い響き! 尾高のチャイコフスキー《悲愴》



8/24 土 第219回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

8/25 日 第219回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

指揮=尾高忠明(名誉客演指揮者)
ヴァイオリン=アナ・マリア・ヴァルデラマ
メンデルスゾーン:序曲《フィンガルの洞窟》
メンデルスゾーン:ヴァイオリン協奏曲
チャイコフスキー:交響曲 第6番《悲愴》

読響チケットWEB <http://yomikyo.pia.jp/>

インターネットで24時間いつでもお申し込みができ、ご自身でお好みの座席をお選びいただけます。上記URLもしくはホームページのトップページ【読響チケットWEB】のボタンから、ぜひご利用ください。

※初回お申し込み時は利用登録(無料)が必要です。

■東京二期会オペラ劇場 歌劇〈サロメ〉

6/5 水 18:30 6/6 木 14:00 6/8 土 14:00 6/9 日 14:00

東京文化会館 大ホール

指揮=セバスティアン・ヴァイグレ

演出=ヴィリー・デッカー

出演=今尾 滋、池田香織、森谷真理、大沼 徹 ほか(5日、8日)

片寄純也、清水華澄、田崎尚美、萩原 潤 ほか(6日、9日)

リヒャルト・シュトラウス:歌劇〈サロメ〉

[料金] 5日・6日公演: S¥15,000 A¥13,000 B¥10,000 C¥8,000 D¥6,000 学生¥2,000

8日・9日公演: S¥17,000 A¥14,000 B¥11,000 C¥8,000 D¥6,000 学生¥2,000

[お問い合わせ] 二期会チケットセンター 03-3796-1831

■読響シンフォニックライブ 公開収録

6/26 水 19:00
東京芸術劇場

指揮=原田慶太楼

ヴァイオリン=コリヤ・ブラッハー

メゾ・ソプラノ=杉山由紀

ブラームス:ヴァイオリン協奏曲

ファリャ:バレエ音楽〈恋は魔術師〉

ヒナステラ:バレエ音楽〈エスタンシア〉組曲

[お問い合わせ・詳細] 「読響シンフォニックライブ」ホームページ

<http://www.ntv.co.jp/yomikyo/>

[料金] 無料

[応募締切] 5/22(水) 当日消印有効

■読響×アプリコ公演

6/29 土 15:00
大田区民ホール・アプリコ 大ホール

指揮=大友直人

ピアノ=牛牛(ニューニューウ)

ショパン:ピアノ協奏曲 第1番

ブラームス:交響曲 第1番

[料金] S¥4,500 A¥3,500 25歳以下 ¥2,000

[お問い合わせ] アプリコ チケット専用電話 03-3750-1555 (10~20時)
